

解説

小嶋源兵衛家文書について

小嶋家について 山形市三日町の小嶋家（^{おしま} 小嶋源兵衛家、現当主小嶋伊三郎氏）は地元ではよく知られる市南の名望家であり、今日においても、商業をはじめ山形の実業界でひろく活躍している小嶋家一族の本家である。

寄贈された古文書・資料は、天保期から昭和戦後期にいたる経営帳簿および商用書簡が中心である。今回の目録収録にあたっては、天保期から大正期にかけての帳簿類合計788点を対象とし、一紙文書・書簡類および昭和戦前・戦後期の経営帳簿については今後順次に目録を作成していくこととした（小嶋家文書受入の経緯などについては、岩田「^{おしま}小嶋家文書と附属博物館－受入の経緯と保存・整理－」『山形大学附属博物館報』第23号、1997年、を参照されたい）。

江戸中期に山形城下塗師町（現山形市十日町）の鞆師職人であり、その後、銀町（同）で上方交易をおこなう商家として活躍した^{やまこ}小嶋源右衛門家（銀町本家）から、源右衛門弟の駒蔵が分家し、天保中期（1830年代後半）に三日町（現三日町）に居を移して店を開くことから^{おしま}小嶋家は始まる。3代源吉を除いて歴代当主は源兵衛を襲名した（小嶋家の家系および歴代の事績については、後藤嘉一著『小嶋家百年史』小嶋家親和会、1972年、に詳しい）。

経営の概観 開港期（安政期）までの^{おしま}小嶋家は、他の山形城下町商人や上山・谷地・山辺などの近在商人が仕入れた^{よろず}萬商品（荒物・紙・扇子・傘・茶・^{いさば}五十集物・砂糖・反物・^{ふるて}古手・繰綿・油・蠟燭など）を卸売することを基本に、煙草については村山郡産地から直接買付をおこなう中規模商人として成長していった（安政2年〔1855〕の店卸改め額は478両余）。山形城下町や周辺農村へ売るだけでなく、創業期から^{おしま}銀町本家とともに奥州伊達郡（現福島県北部）へ萬商品を売り捌く遠隔地取引を展開させ、重要な収入源としている。

開港期から幕末維新期にかけては、^{よろずあきな}萬商いのほかに、菜種の大量買付を前提とした油絞り業・油商売を積極的に展開している。同時に、菜種粕・荏粕など

の油粕を中心とした肥料商い（農具販売も伴う）を周辺農民に対しておこない、^{おしま}小嶋家商業の足場を広く近在農村に築いていった（年によって紅花買付も実施）。幕末期から^{くらまい}蔵米（領主米）の買付けをはじめ米穀商業にも参画するようになり、明治初年からは経営の比重を主要輸出入となった養蚕生糸・製茶に次第に移し、従来の萬商いは縮小させるなどの経営の転換をはかっている。さらに、幕末期以来、質地貸をはじめ不動産・動産を担保とした貸付や無担保の正金貸を活発におこない（明治10～20年代には質屋〔五等質屋〕も営業）、これに併行して明治中期までに宅地および土地集積を進めている。小嶋家の立附米高は明治6年（1873）には188俵余（山形県地券係立附米調）、明治19年（1886）には361俵余（うち自耕作84俵余、田畑立附帳）の地主に成長している。

明治10～30年代は養蚕生糸・製茶・米穀商業が経営の基軸である。製茶では茶摘みや茶製造に日雇を雇用し、養蚕生糸においても桑葉摘や蚕^{こしらえ}拵・糸取に雇用し、生糸・繭・真綿の売上による「養蚕製糸ノ利潤金」として明治25年には240円余を計上している。この時期、小嶋家が商業資本家としてのみならず、企業家（中小ブルジョアジー）としての性格を帯びたことが指摘できる。

明治30年代半ばから大正期にかけては、内外米・大豆粕・搗麦・^{ふすま}麩などの米穀商業・肥料飼料商いに経営を集中させ、とくに南京米などの輸入外国米の卸売を活発におこなっている。また石油の仕入・卸売も手掛け、明治40年代には「米穀肥料石油 小嶋^{おしま}商店」「内外米諸肥料商 ^{おしま}小嶋商店」と自己を表現していることが確認される。今回収録できなかった昭和戦前期には、小嶋源兵衛は山形米穀商業組合長や山形商工会議所議員を歴任し、戦時統制経済期には肥料・飼料会社（配給組合）を経営し戦後にいたっている。

小嶋家文書の特徴 今回の目録に収録する小嶋家文書の中心は、以上述べてきた同家の多角的な経営に関する諸帳簿である。やや欠落の多い明治20年代後半から30年代前半を除いて、主要な経営帳簿が揃っているのが特色である。

まず、小嶋家の経営を統括する「内方」における金銀出入りを記帳した「金銀

(銭) 出入帳」が天保期から明治末まであり、経営全体の資金繰り(「内方大出入之方」)の実態があきらかとなる。「仕入帳」も天保～大正前半期まであり、小嶋家の取扱商品・仕入先の全体的な動向を連年にわたって分析できる。また、売方の差引決算の基本台帳である「大福帳」が明治中期まであり、これに掛売台帳である「店貸帳」「書出帳」をあわせて、商品販売の実態を検討しうる。さらに、奥州伊達郡への売方については別に「伊達金銀出入荷物受払帳」「伊達大福帳」が作成されており、^{こおり}桑折・福島方面の取引実態が判明する。

油・肥料・養蚕生糸・製茶については、各業のピーク時に独自の出入帳・仕入帳・売(貸)帳・書出帳などが随時作成されており、「水油諸調帳」「養蚕生糸諸扣帳」「茶製帳」において各々独立に採算勘定が試みられていることが注目される。これらの諸帳の日雇記録や「人夫日雇帳」「日雇勘定帳」は、粉拵油打・糸引・桑葉摘や自耕作における雇用労働の実態を記すものである。

明治30年代半ばからの外国米を中心とした米穀・肥料商業に関しても諸帳面が揃っている。「荷受帳」「書抜帳」「時貸帳」を分析することにより外米の仕入・倉庫保管・販売の実態分析が可能である。「利益決算帳」で各回取引毎の損益計算がなされており、「仕入帳」とあわせて外米取引の全貌に迫りうる。

また、「(地所) 書入貸控帳」「貸方帳」「質貸帳」から貸付業展開の実態が把握できる。地主経営帳簿としては「田畑立附帳」「立附米金受取帳」が揃っている。「諸費帳」は小嶋家のいわば家計簿であり、その資金は「内方」より入費として逐次補給されていることが「金銀出入帳」からわかる。「諸費帳」から、当時の山形における消費生活の一局面を考察することも可能であろう。

以上述べたように、小嶋家は中規模城下町商人として出発し、近代においても主に商業資本家として活躍し、山形商業界の中心的存在へと成長していった家である。その意味で、小嶋家文書は江戸時代後期から近代における山形商業の転換および展開の具体相をあきらかにするうえで誠に貴重なものであるといえる。各方面での活用を期待するものである。

(岩田浩太郎)